

冬に流行 R Sウイルス

早産児、薬で重症化防ぐ

埼玉県の主婦A子さん(34)は昨年5月、二男を妊娠6か月で出産した。体重は617グラムで、NICU(新生児集中治療室)で治療を受けた。9月、退院を前に、小児科医から、早産児では、特に冬場に注意が必要なRSウイルスについて説明を受け、発症した場合に重症化が予防できる薬を今年4月まで毎月注射した。入院もなく、1年目の冬を乗り切った。(中島久美子)

RSウイルスは風邪を引き起こすウイルスの一つ。毎年10月ごろから翌年春まで、多くの人が感染し、発熱や鼻水といった風邪の症状が表れる。しかし、1歳未満の乳児やとりわけ、妊娠35週以前に誕生した早産児では、重症化して、まれに死に至ることもあるので注意が必要だ。

ウイルスが気道に入ると、痰(たん)が増えるが、1歳未満は肺が未熟なため、痰で気管が詰まりやすい。呼吸が苦しくなり、肺炎や気管支炎を起こす危険がある。冬期間、乳児の入院患者の4分の1は、RSウイルス感染が原因とされ、気管を拡張する薬の投与などが行われる。

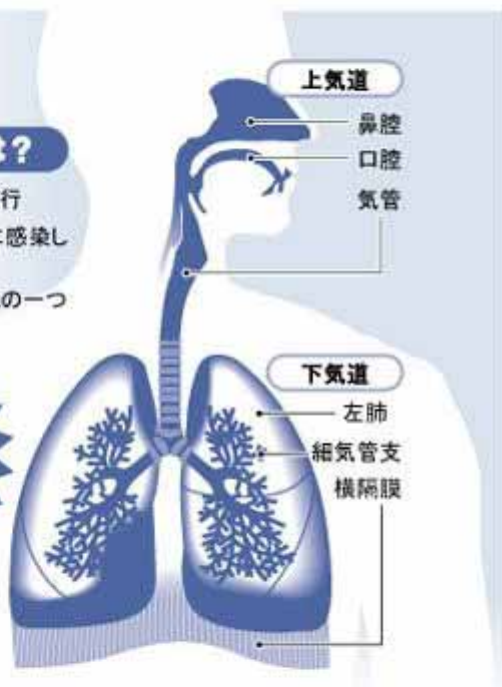
さらに、感染後も、息をする時にヒューヒュー、ゼーゼーを繰り返す「反復性ぜん鳴」や、ぜんそくを発症する可能性も高くなる。

普通の乳児以上に、重症化して、肺炎や気管支炎を起こすおそれが高いのが早産児だ。未熟な肺機能に加え、母親から胎盤を通じてウイルスの抗体を十分受け継いでいないことが関係している。



RSウイルスとは？

- 毎年秋から翌年春まで流行
- 乳児がかかると下気道に感染し重症化しやすい
- かぜを引き起こすウイルスの一つ



月に1度重症化予防薬を投与

デザイン 渡邊藤牧子

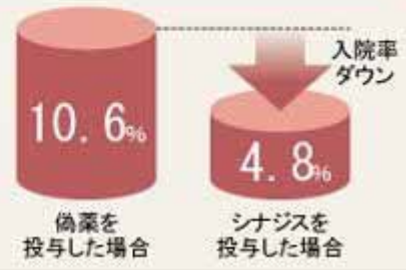
投与対象 RSウイルス感染流行開始時(10月ごろ)において

- 1 妊娠28週以下の早産で、12か月以下の子供
- 2 妊娠29～35週の早産で6か月以下の子供
- 3 過去半年以内に気管支肺異形成症の治療を受けた2歳以下の子供
- 4 血液の循環に問題のある2歳以下の先天性心疾患の子供



RSウイルス感染症重症化予防薬 シナジス

RSウイルス感染による入院率



感染を予防するには、インフルエンザなどと同様、家族全員の手洗いの励行や、風邪をひいた家族のマスク着用、流行期に人込みを避けるといった注意が必要だ。

さらに、感染しても重症化を予防する目的で、早産児らを対象に、抗体・シナジス（一般名・パリビズマブ）という薬を注射する方法がある。国内では2002年、保険適用となった。流行期に月1回、注射する。抗体は、RSウイルスが気道の細胞に侵入して増殖するのを抑える。

海外の1500人への臨床試験では、シナジスを定期的に投与すると、薬効成分が入っていない偽薬を投与した場合と比べ、RSウイルス感染で入院する率が4.8%と半減した。妊娠32～35週で生まれた乳児では、偽薬群9.8%に対し、投与群は2%だった。

また今年6月、欧米の27施設が参加した研究では、シナジスを投与すると、早産児の反復性ぜん鳴の発症を減らすことも報告された。

副作用もある。主に注射した部分のはれや発熱で、早産児らを対象とした臨床試験では、それぞれ3%弱に起きた。

A子さんの二男も、昨年9月から今年4月まで月1回、シナジスの投与を受けた。A子さんは、「自宅でも風邪をひいた家族は別室で寝るなど注意を払ったこともあり、冬場の入院はなく過ごせました」と振り返る。

だが、産婦人科医の間でも重症化予防薬の知識が定着していない。昨年春、NICUのない施設に勤務する産婦人科医330人を対象にした調査では、シナジスを知っていたのは25%だった。

早産児はどの週数でも、RSウイルス感染で重症化するおそれは通常より高いとされる。慶応大小児科講師の池田一成さんは、「早産児でも、比較的

体重もあり、問題なく生まれた場合は、小児科医が関与せず退院することも多い。すると、親にRSウイルスの情報が届かず重症化を招くこともある」と指摘する。

シナジスは、各自治体の乳幼児医療費助成制度も適用される。ただし、自治体によっては、窓口で一度自己負担分(数万円程度)を支払う必要がある。投与施設は、小児科医が監修したホームページ「スモールベイビー・com」(<http://www.small-baby.com/>)で検索できる。

(2007年10月26日読売新聞)